



理事長挨拶

理事長
本庄 照子

本庄国際奨学財団の奨学生の皆さん、OB・OGの皆さん、こんにちは。日本は本格的な冬を迎え、日に日に寒さも厳しくなってきました。世界各地にいらっしゃる皆さん、お元気でいらっしゃいますでしょうか。

公益財団法人本庄国際奨学財団は1996年12月25日に設立され、来年2014年には18期生を迎えることとなります。設立当時より、本財団は世界各国各地域の平和的發展を願い、将来その国のリーダーとなり得る学生に対して支援をして参りました。応募に関しては、研究分野を問わず誰でも財団へ応募できる制度を採っております。平成25年までに奨学金を受けた留学生はのべ64ヶ国、421名となりました。卒業された方々は、帰国後母国のために力を尽くし世界各国で活躍しております。

本庄国際奨学財団では奨学生に対し、奨学金支給のみならず様々な支援活動を行っております。例えば、日本の文化を体験する会、OB・OGを講師に招いての講演会、現役奨学生とOB・OGとの懇親会、この

ような交流の場を年間を通して開催しております。本財団の皆さんは、是非積極的に参加してみてください。世界各国で活躍する皆さんにとって、このような交流の場は、とても有意義な機会になると思います。そして、本財団で築いた人間関係は、今日の国際社会において大変貴重な財産になるものと期待しております。私共にとっても、皆さん一人一人との人間関係が貴重な財産です。卒業されても皆さんとのお縁が途切れることはありません。皆さんが母国に帰られてからも様々な分野でご活躍されている様子をうかがうことは何よりも嬉しいこととさせていただきます。主人が存命ならばどんなにか喜び、誇らしく思うことでしょう。つつい思いが重なります。

本財団は今後も毎年新しい奨学生を迎え、一人でも多くの意欲に燃えた若い人達に支援を続け、国際交流のために力を尽くしていきたいと考えております。また、皆さんが志を高く持ち、母国と日本の掛橋となりますよう、私共はこれからも応援し続けて参ります。

目次

- 01 理事長挨拶
- 02 1年間の活動
- 04 SENPAI! インタビュー VOL.2 ① — ミユル・ダヤラトナ
- 05 SENPAI! インタビュー VOL.2 ② — ザーラ・アリアファル
- 06 卒業生寄稿 ① — ソ・ソクンテリー
「サンボ・プレイ・クックを世界遺産に」
- 07 卒業生寄稿 ② — 三原 芳秋
「文学博士、本庄宇宙を語る(または、文学博士のつくり方)」
- 08 卒業生寄稿 ③ — アスケーロ・ファビオ
「『異文化理解』を理解する～留学生が先生! 教育プログラムに参加して～」

- 09 ニューヨークからの手紙～JMSA受賞者より～
「研究レポート」 — 谷野 美雪
- 10 ニューヨークからの手紙～JAA受賞者より～
「お墓の文字を写す」 — クリストファー・リーヴス
- 11 お元気ですか? ～本庄スカラーからのメッセージ～
- 13 HISFワークショップ
- 14 2014～2015年度奨学金・研究助成金の公募案内
奨学生ニュース / 財団の概要 / 謝辞
- 15 17年間の軌跡 / Journey of 17 years

Contents

- 17 Words from the President
- 18 Timeline 2012-2013
- 20 SENPAI! Interview VOL.2 ① — Gorokgodage Miyuru Dilshan Dayarathna, Ph.D.
- 21 SENPAI! Interview VOL.2 ② — Zahra Ariyafar
- 22 HISF Alumni in Action ① — So Sokuntheary, Ph.D.
"Report on Activity of the Sambor Prei Kuk Conservation Work"
- 23 HISF Alumni in Action ② — Yoshiaki Mihara, Ph.D.
"A Brief History of Honjo-Verse, or How to Breed a Ph.D. in Literature"
- 24 HISF Alumni in Action ③ — Fabio Aschero
"Promoting the Understanding of Foreign Cultures in Japanese Schools"

- 25 A Letter from New York ~JMSA prize winner~
"Research Report" — Miyuki Tanino
- 26 A Letter from New York ~JAA prize winner~
"Copying Epitaphs by Night" — Kristopher Reeves
- 27 How are you? ~Messages from Honjo Alumni~
- 29 HISF Workshop
- 30 Guideline for Scholarship and Research Fellowship
in 2014-2015
Scholars News / About Us / Acknowledgements

カバーデザイン 小淵 暁子

1年間の活動

2012-2013

2012年

9月 September
● 京都研修旅行 (9月15日～17日)

11月 November
● 第4回HISF ワークショップ (11月4日)

12月 December
● 忘年会 (12月27日)

2013年

2月 February
● スポーツ大会 (2月13日)

3月 March
● 同窓会・バンコク (3月10日)
● 同窓会・プノンペン (3月15日)
● 歓送迎会 (3月27日)

4月 April
● 水ボラ※ (4月28日)
● BBQ大会 (4月29日)

5月 May
● 水ボラ※ (5月18日)
● 博士論文発表会 (5月19日)

6月 June
● 水ボラ※ (6月8日)
● 静岡研修旅行 (6月21～22日)

7月 July
● 第5回HISF ワークショップ (7月7日)
● 水ボラ※ (7月27日)

8月 August
● 水ボラ※ (8月3日 & 17日)

9月 September
● 仙台OB会 (9月5日)
● 水ボラ※ (9月7日)
● 東北水ボラ※研修旅行 (9月27～29日)

10月 October
● スポーツ大会 (10月18日)
● 水ボラ※ (10月19日)
● 京都OB会 (10月24日)

※水ボラ・・・岩手県立大学の震災復興支援活動に賛同して、陸前高田市内の仮設住宅へミネラルウォーターをお届けするボランティア活動。

2012-2013

1年間の活動

同窓会を開催しました!

2013年3月 バンコク(タイ)

チャオプラヤ川のディナークルーズにアジア在住の約30名が集いました。



2013年3月

プノンペン(カンボジア)
プノンペンの高校訪問、
アンコールワット見学と
同窓会を行いました。



2013年9月 仙台
東北大学の4名と
東北の美味しい
海の幸を囲んで。



2013年10月 京都
歴史ある京町屋で
10名が宇宙論で
盛り上がる。



水ボラ(東日本大震災復興支援活動)を続けています。

岩手県立大学の震災復興事業に賛同し、陸前高田市で仮設住宅にミネラルウォーターを届けるボランティア活動を継続的に行っています。



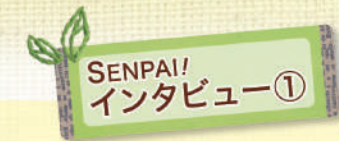
東北研修旅行

2013年9月

岩手県立大学の協力をいただき、
平泉中尊寺見学と水ボラを行いました。



SENPAI! インタビュー vol.2



ミユル・ダヤラタナ (15期生/スリランカ)
Gorokgodage Miyuru Dilshan Dayarathna, Ph.D.

2008年9月来日。慶應義塾大学メディアデザイン研究科で修士課程を取得。2010年10月東京工業大学情報理工学専攻博士課程に進学。2013年9月博士号を取得してスリランカに帰国。高速処理コンピューターソフトウェアの開発が専門。

ミユルさんが開発したコンピューターソフトには「Hirundo」をはじめいくつかの鳥の名前がつけられています。東工大のシンボルであり東工大が開発するスパコン「ツバメ」に敬意を表したものだそうです。

縁の下の力持ち

「この分野は医学や物理学などあらゆる研究分野のデータ処理や解析を助けるためにあります。まさに縁の下の力持ちです」と語るミユルさんは、鋭利な発想と深い知識、そして謙虚さと心優しさを持ち合わせた人です。高速コンピューターさながらのスピードで駆け抜けた5年間の留学に日本を選んだきっかけは?

「日本はコンピュータサイエンスの世界で高度な技術力を持った数少ない国のひとつです。高品質の製品と最先端の研究が日本留学の動機となりました。そしてアジアの中で独特である日本の文化を学びたいと思いました。当初は私の日本語能力で大丈夫かと思いましたが、慶應大でも東工大でも外国人のための充実した環境が整えられており、すぐに満足しました。私はコンピューターソフトウェアやネットワークについて複数のトピックに興味があり、世界有数の東工大で博士号を取得することで来日前に持っていた目標を100%達成することができましたが、大規模データ解析をもっと勉強して人々にとって有益なシステムについてさらに研究を深めたいです。グーグル、ヤフー、フェイスブックなどの巨大コンピューター企業は大規模データを管理運営する巨大なシステムを持っていますが一層の正確さや高品質が要求されており、さらなる開発が必要です」

大規模データ処理は日常生活に欠かせない
この研究の面白いところはどこでしょうか?

「いろいろなところから集められたデータはどんどん膨大化するので必要な情報を即座に入手するにはデータを集約しなければならない。コンピューター科学者としてそこが面白いです。私は大規模データ解析システムの性能特性について研究し、博士論文ではデータストリームプログラムの最適化のための、新しいコード生成に基づいた自動チューニング技術を提案しました。大規模データの膨大化はとても重要で日常生活にも深く

かかわっています。ヤフーやGmailなどの電子メールシステム、フェイスブックなどのソーシャルネットワークサービスにおいては、待ち時間は短くかつ高品質のサービスが要求されます。研究者はシステムの様々な性能側面を認識し、新しい性能モデルとそれを解析する技術の開発に努めるべきです。たとえば大規模システムで起こる予測不可能な現象に対して備える必要があります」

研究や日常生活で大切にしていることがありますか?

「研究倫理を守るようにしています。多くの研究者がそうであるように、一般社会で有益な研究を行いたいと思っています」

人々のためになる仕事を

これからは?

「大規模データ解析システムの研究を続けます。特にこれまでの研究が実生活に活用されるように、だれでも使えるソフトウェアとしてリリースされ、人々の利益となることを望んでいます。最新技術に乗り遅れないように論文をたくさん読み、たくさん勉強し、この研究にもっと深く携わっていきたいです。そして社会から高い評価を受ける人間でありたいと思います」



2013年9月 プェンスアイレスで

普段当たり前のように使っているメールやSNSの裏には高度で精密な研究があることを教えられました。スリランカの大学生のころに繰り返し読んだコンピューターサイエンスの本の著者である老研究者に国際学会で会ったことを子供のよう喜んでいたミユルさんの笑顔を忘れることができません。ますます優れた研究を期待しています。

SENPAI! インタビュー vol.2



ザーラ・アリアファル (12期生/イラン)
Zahra Ariyafar

2002年国費留学生として来日し、2003年に鹿児島工業高等専門学校に入学。2006年電気通信大学に編入し2010年無線通信の研究で修士号を取得。シスコシステムズ株式会社でプレセールスエンジニアとして営業担当と共に顧客企業のITインフラの課題に対してソリューションを提案する。2013年9月に退職し現在はチューリッヒ工科大学でMBA取得のため再び留学中。

2013年7月のOB会で久しぶりに会ったザーラさんは、変わらないやさしい笑顔を振りまき周囲をたちまち明るくする女性でした。就職して3年。忙しくも充実した日々を送っていましたがビジネスの知識を得てエンジニアとしての能力をさらに発揮させるために再び留学の道を選びました。

「日本が好きだから卒業したら
また戻ってきます」

明るさとバイタリティーで営業兼エンジニアとして高い評価を受けたザーラさん。一方で日本社会独特の習慣や人間関係に戸惑ったこともあるのでは？

「晩くまでオフィスにいて、連日飲み会をするのが好きだということに驚きました。外資系の企業だったので日本の会社よりもワークライフバランスのカルチャーは進んでいたと思いますが、他国に比べるとオフィスにいる時間が長すぎる。飲み会は月1〜2回でよいのですが、頻度が高くなるとついていけないですね。面白いのは、飲み会の参加が減ると社内のコネクションが減り、異動や昇進などに影響が出るということも過言ではありません」

ワークライフバランスや女性の登用については疑問を持つこともあったようですが、仕事はしっかりこなしてきました。仕事や生活の上で心がけていることはなんですか？

「約束を守ること。性格的に責任感が強いので一度『やります』と言ったら最後までやり遂げないと気がすみません。結果として信頼関係を作りやすいのですが、責任感に押されて複数のタスクを実行しようとして過大な負担を自分にかけてしまうことはマイナスです」

もっと発言力とチャレンジ精神を！
女性の働き方についてはどう思いますか？

「日本の女性は高い教育を受け、芯が強く精神的にもとても強いと思いますが、この力を持ってもっと発言力とチャレンジ精神を高めないといけないと思います。男性も同じですが。そして日本の男性はもっと心から女性を励ましてあげてほしい。たとえば2年前になでしこジャパンが金メダルを

取った時に、私の周りにはそれに関心(関心があっても表で表現しない)な男性が多くて驚きました。男性が女性を誇りに思わないと社会全体の意識は変わりにくいでしょう」

イランや他国から学ぶことがあるとすればどんなことだと思いますか？

「イランやヨーロッパでは正社員でも週の4割や6割だけ働く職種が用意されています。つまり出産後すぐに復帰したい女性は週三日や四日の勤務が許されているのです。日本の会社でも毎日働けない女性に合わせた職種が増えるといいと思います」

グローバルリーダーを目指す

MBA取得後はどんなふうに働きたいですか？

「まだ入学したばかり次の仕事は明確になっていないのですが、将来的にアジアとヨーロッパの間で動いているプロジェクトに参加したいです。現在、プロジェクトマネジメントやリーダーシップのスキルも磨いているので、長期的にはグローバルリーダーになりたい」

仕事以外にはどんなことを？

「スキダイビングをやりたいし、せっかくスイスに来たのでスキーを上達させたいです」

1年後一層成長したザーラさんと日本で会えることを楽しみにしています。



チューリッヒ湖の公園
チューリッヒでの部屋探しなどが落ち着いてからは毎日散歩していた場所です。

卒業生寄稿①

サンボークックを
世界遺産に

カンボジアのノートン大学建築学専攻長、メコン大学講師
サンボークック遺跡群保存事業統括責任者
建築学博士(2008年早稲田大学)



ソ・ソクンテリー (9期生/カンボジア)

サンボークック遺跡群保存事業

カンボジアのほぼ中央に位置するサンボークックは古代アンコール王朝に先立ち7世紀初頭にあったとされるチェンラ王朝の首都、イーシャナプラに比定される寺院群と都城による遺跡群です。早稲田大学建築史研究室(代表中川武



教授)の調査隊を前身とし、2001年に早稲田大学とカンボジア文化芸術省との共同事業が立ち上がり、寺院の再建と内部の再生のため、草の根的活動を行っています。

ことも文化の継承のために欠かせません。2008年からは保存修復作業に地元民の協力を得ています。この遺跡群はこの地に帰属するという意識を持ってもらうことが重要だからです。

また、大学生や地元の高校生をトレーニングして、将来保存修復や調査研究に携われる人材育成も行っています。2003年からは早稲田大学と共同で交流事業を行っています。遺跡の調査を見学して地元民と意見交換を行い、踊りを披露して文化交流を行います。



寺院内部に仏像を新たに設置



地元民の協力を得たテラスの修復作業

保存修復活動



寺院に覆いがかった樹木を除去



寺院内部の修復

サンボークック遺跡群の存在は19世紀にフランス人の探検家により初めてヨーロッパに紹介されました。長い内戦により保存調査が中断されましたが、1998年に早稲田大学が調査に入り、多くの寺院が損傷した土にすっぽり覆われているものもありました。保存修復作業はまず草を除き樹木を伐採し、崩壊寸前の寺院に支えを入れることから始まりました。さらに仏教信仰の強い地元民にとって寺院は重要な信仰の対象であり、寺院内部に仏像を再配置する



テラスの修復作業前の説明と作業完成後

世界遺産へ

サンボークックは世界遺産に登録されるべき最も重要な遺跡の一つです。カンボジア政府は世界遺産登録申請の準備をしています。我々の保存事業チームはその中心的役割を担い、月に1〜2回の世界遺産登録申請会議をプノンベンまたはサンボークックで行い、世界遺産登録へ向けて一丸となって取り組んでいます。



ユネスコによる現地視察

卒業生寄稿②

文学博士、本庄宇宙を語る (または、文学博士の作り方)

同志社大学グローバル地域文化学部准教授 文学博士

三原 芳秋 (6期生/日本)



ビッグバンとともに誕生した本庄宇宙は、まだ小さな火の玉で、陽子や中性子や伊都子が所狭しと飛びまわる、それはそれは「熱い」宇宙だった。その頃、雪に埋もれた極寒のニューヨーク州イサカでは、その顔に一抹の愁いをたたえた文学青年が、コーネル大学大学院で英文学の研究にいそんでいた。そこに、本庄国際奨学財団事務局から一本の国際電話——「書類選考に通りました。面接にいらっしゃることはできますか?」「いやあ、ちょっと無理です」「そうですか、それでは、あなたに決まりです」——これが、すべての始まりである……

後輩の香坂玲くん(4期生)の推薦で、2002年から本庄のお世話になりました。アメリカの大学院生は、通常TAとして大学に勤労奉仕することによって最低限の生活保障を受けながら残りの時間をつかって勉学に励むわけですが、僕の場合、本庄奨学金のおかげでその労働を免除され、自分の研究に没頭することができました。そうやって、同級生たちよりも少し早めに博士論文執筆資格を得るための試験にパスすることができたわけですが、「さあ博論執筆」という段になって、僕がアメリカでもあまりにも愉しそうなことを嫉妬されてか、日本に強制帰国、そのまま大学教員としてサラリーマン生活に入りました。

理系のみなさんには、少々わかりにくいことかもしれませんが、文系の場合、実験や共同研究というものがほとんど必要なく、いわば「筆一本」で論文が執筆できるので、試験にパスしてABD(All But Dissertation)になれば、あとは野となれ山となれ、どこでなにをしようとも本人の「自己責任」で、とにかく博士論文を書き上げて提出さえすれば良いのです。ただ、この自由度の高さが、かえって命取りになることもしばしば。僕の場合、教員生活をしながら日々の労働にかまけて、ずるずると博論執筆を先延ばしにしてしまいました。やっと改心し、毎朝3時に起床して出勤前に執筆を始めたのが数年前。いよいよ佳境を迎えつつあったある日、本庄事務局から大きな荷物が届きました。中には伊藤園の野菜ジュース数十パック。それから毎朝、日の出る前に起き出して、野菜ジュースを1パック飲みほし、「この段ボールが空になる前に完成してみせる!」と自分に言い聞かせて頑張ったのでした……おかげさまで、昨年夏、博士論文を完成し口頭試問にも合格し、古い借金を返すことができました。それもこれも、本庄奨学金と「1日分の野菜」のおかげです。

……その後、本庄宇宙は指数関数的に膨張し、今ではすっかり安定期を迎え、しかしそれでも、まだまだ着実に膨張を続け

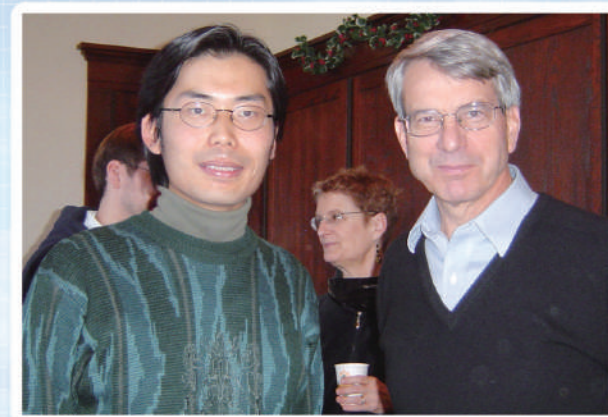
ている(ハッブルの法則)。本庄宇宙を満たす数多の光り輝く星々は、あちらこちらに美しい星座を形作りながら、冬の夜空を照らしている。

〈追記〉

文学博士がなぜ宇宙物理学の用語を使うのか不思議に思った方は、ぜひ、京町屋で開かれる関西OB・OG会にご参加ください。膨張する宇宙やクルクル回るたんぱく質の話をしなから、美味しい京料理にお酒、そして「TEAS' TEA」を満喫できる素晴らしい寄り合いです。「地方(=洛外)」のみなさんも、ぜひ、おこしやす。



コーネル大の同級生たちとピクニック



指導教授のJonathan Culler先生とコーネル英文科パーティーで

みはら よしあき

2000年東京大学大学院修士課程修了・同助手に就任
2001年よりコーネル大学大学院博士課程留学
専門は英米文学、批評理論

卒業生寄稿③

「異文化理解」を理解する ～「留学生が先生! 教育プログラム」 に参加して～

慶應義塾大学商学研究科博士課程単位取得

アスケーロ・ファビオ (10期生/イタリア)



同じ学校、異なる学校

まず驚いたのは、日本の学校というものが大抵どれも同じであるということ。教育的配慮が余すところなく払われた学校施設には、運動場があり、下足箱のある出入り口があり、来訪者に温かいお茶がふるまわれる低いソファを備えた校長室があり、廊下があって階段があって、そこには子供たちの書道作品が張り出されてある……子供たちはどの子も見分けがつきにくい。誰も個性を楽しもうなんて考えはなく同じ制服をきちんと着て、協力はするが進んで手をあげて質問しようとはしない。さらに驚いたことに、外の世界について知っていることも大体同じ、イタリアについても例外ではない。

しかし私は、日本の社会全体が場所も人も同じように見える、学校もしかし、というのはうべだだけの欺きであり、本当は一人一人は違う答えをもっているという結論に達した。この活動を通して私は新しいものに目を開き、大切な思い出を心に刻むことになる。

協会の活動

私は数年前から公益財団法人国際理解支援協会の活動に参加し、およそ100校の東京の教育機関を訪れ、1000人以上の教育者と出会う機会に恵まれた。この協会は「留学生が先生! 教育プログラム」という活動を主に行っており、各国出身の留学生(主に大学院生)が先生となって都内の学校を回り、出身国の紹介、研究内容、日本留学の動機、日本と自分の国との違いや驚いたことなどについて50分間の授業をおこなう。

非常に広範囲に学校を訪問する機会に恵まれた。主に東京都内の小学校6年生、中学生、高校1年生を対象に、時には幕張、川口、我孫子へも足を延ばし、山間の檜(ひの)原(はら)や離島の八丈島へも行った。富裕層の子供が多い渋谷の松濤や、公団住宅の立ち並ぶ光が丘まで実に様々な学校を訪問した。授業では概ね日本語を使ったが、時には英語で話してくれと言われることもあり、駒場にある都立国際高校では英語の授業がとて功を奏したようだった。

良いイメージから真の興味へ

最初に述べたとおり、子供たちは年代、地域、社会、言葉の相違にかかわらず、画一的な性格をもち同じような反応を示すと感じた。

「イタリアは素敵で美しく、国民は優しくて陽気」。子供たちは根拠はないが100%疑いもなくイタリアに対してポジティブな

イメージを持っている。更にイタリアがブーツの形をした国で、サッカーが有名、そしてマルゲリータピザにはモツアレラチーズ、ということをはほとんど全員が知っているようだった。イタリア料理にまつわる情報が多い。こういった固定観念や間違った知識も均等に拡散されている。海があり温暖でオリーブやトマトが食卓に並ぶといった一般的なイタリアのイメージは南部のナポリのような場所を指し、一方でフランスと重なるイタリアもある。(パリや「ボンジュール」をイタリアのことだと勘違いする若い学者もいる)正しいか正しくないかは別として、大多数の子供たちは私の国についてある一定の標準化された図式に納得している。



江戸川区立葛西第三中学校の授業

ところが彼らはただ情報を鵜呑みにしているのではなかった。50分の授業の間に子供たちが興味を持ち始めていたと感じた。私の授業は彼らにとって異国情緒溢れるただのお話ではなく、何か未知のものに触れる機会を与えるかけ橋のような存在になっていた。

留学なんて興味ないし、外国語の勉強なんて難しくていやだ。ちょっと怖い……と平気で言っていた子供たちも、授業のあとでは新しい意欲に燃え、もっと知りたいと言ってきた。(あとで先生からいただいた感想文にそう書いてあった)漠然としたイタリアの良いイメージが次第に真の興味へと変化し、そして日本や他国と比較し批判的なものの見方ができるようになったとき、はじめて「異文化理解」への一歩が開かれるのだろう。

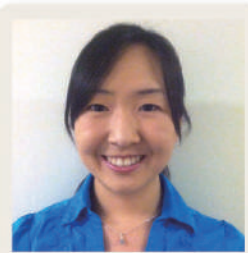
アスケーロ・ファビオ

イタリア北部のサポーナ出身。1996年に在日イタリア商工会議所の奨学生として初来日。ミラノ・ボッコニ大学卒業後、1999年に文部科学省国費留学生として再び慶應義塾大学大学院商学研究科に学ぶ。専門は社会経済史。

ニューヨークからの手紙

日米に関する研究に助成する海外提携プログラム奨学生の寄稿を紹介しします。

～JMSA(米国日本人医師会)～



谷野 美雪 Miyuki Tanino

米国ニューヨーク州に生まれ、ニューヨーク、日本、シンガポールで育つ。高校時代に日本からアメリカに引っ越し、その後コーネル大学で生物学・動物学を専攻し、ワイル・コーネル医科大学を卒業。現在はニューヨーク州アルバニーメディカルセンターで内科・小児科の一年目の研修医をしています。

ホームレス問題はニューヨークに住む何万人もの人々の生活に影響を与えています。私は本庄JMSA奨学金のプロジェクトの一環として、ニューヨークに住む日本人ホームレスについて調査を行う中で興味深い経歴をもつ一人の日本人男性に会いました。

彼は1942年生まれの日系ブラジル人。19歳の時に南米への移住を推奨する政府のプログラムでブラジルへ行きました。ところが日本政府が宣伝していたこととは違い、ブラジルでの職場環境や賃金は過酷でした。最初の数年は、生きるか死ぬかの戦いで、農場やツアーガイドとして働き、1970年代にニューヨークへ移住することを決意しました。そこでは何軒かの日本食レストランで働きましたが、1995年、50代の半ばに仕事を失いました。

最初のうちは日本に住む家族のサポートもあり、生活を続けることができましたが1999年には遂にアパートに住むことができなくなってしまいました。ホームレスとなつてすぐの数年间は地下鉄の駅に住んでいましたが、幾度も強盗に遭いパスポートも奪われてしまい、安全な場所へ移りました。現在は路上での生活にもうまく適応し、生きていくために必要な術(雨を避けたり暖を取ったり食料を確保するなど)を身につけています。彼の持ち物である洋服・ブランケット・食品・工具などは3台のショッピングカートに乗せられていて、所持品のほとんどはフリーマーケットや寄付で手に入れたものです。カートにかけられた袋には予備のタイヤが入っていて、いつでも直せるように大きな工具も準備されています。また通行人から食料を分けてもらった時には小さなコンロで調理もしています。



私は彼に日本人のソーシャルワーカーを紹介しようかと提案したこともありますが、「まだそこまで落ちぶれてはいない」と拒否されてしまいました。ニューヨークのホームレス登録所からも援助の申し出がありましたが、言葉の壁があり、なかなかコミュニケーションがうまく取れません。日本に住んでいる家族との連絡も途絶え、ニューヨークで知り合った知人達も日本へ帰ってしまいました。彼の今後について尋ねたところ「南米へ帰りた

い、そこが故郷とを感じる場所だから」と言いました。しかしながら、そこにも連絡ができる人はもう誰もいません。今は街を歩き、スーパーへ行き、コインランドリーへ行ってフリーマーケットで物を買う、という毎日のルーティーンを繰り返しています。

限られた時間の中では彼の微妙な心的状況を評価することはできませんでしたが、彼は重度の精神疾患を持つようになった経緯が異なるように思えます。多少の精神疾患に加わり、社会との繋がりの欠如や言葉の壁、援助を受けることへの抵抗感などが、彼のようなホームレスを形成した要因と言えるでしょう。移民ホームレスについての調査結果としては、彼らは慢性疾患、精神疾患や薬物乱用の頻度が一般的なホームレスに比べ低く、ローカルの人々とは違う形でのサポートを必要としていることが分かります。同じように、この日本人の男性も一般的なホームレスとは違い、別の援助が必要なのではないかと思います。

ニューヨークにもっと日本人ホームレスがいらないかと、ソーシャルワーカーや日系の機関に問い合わせました。「以前ホームレスだった」または「ホームレスになっていたかもしれない」という知り合いがいる方達と連絡を取りましたが、彼らは住居などの個人的な援助を日本人から受け、今ではホームレス生活をしている人は彼以外には把握されていないということでした。



このプロジェクトを通して、ニューヨークに住む日本人ホームレスは他のホームレスとは違った状況で生活していることがわかりました。ソーシャルサービス・精神的なケア・言語支援などが彼らには必要です。どんなサービスが提供されているかを知らない人も多く、もっと簡単にその情報を必要としている人々の元に届くよう、一般の日本人にも浸透するようにしていかなければいけないと思います。

このような機会を与えてくださった本庄国際奨学財団に深く感謝いたします。

このように機会を与えてくださった本庄国際奨学財団に深く感謝いたします。

～JAA(NY日系人協会)～



クリストファー・リーヴス Kristopher Reeves

カナダ出身。2003年に来日し熊本の小・中学校で英語を教える。2009年に京都大学、2013年にアルバータ大学(カナダ)で日本文学の修士号を取得。現在コロンビア大学大学院博士課程で日本文学(古典から現代まで)を研究している。日本語、中国語に堪能。

お墓の文字を写す

二〇一三年十月十八日 孟秋、紐育にて

次の話を聞かせて上げようと思う。記憶の虫食みを補うとして多少は修飾を加えたかも知れないが、半ば目を瞑ってまあ実話として受け入れても差し支えはなからう。なお、当稿の依頼を請うた際、自分の文章を英語に訳すように頼まれた以上、英訳も作ってみた。日本語で文章を認める時と、英語で文を綴る時とは思考法が微妙に違う。思考は言語に左右されるものと認めざるを得ない。今回はまず日本語の文章を書きそれから英訳を作ったので、両方読めばきつとその差に気が付くだろう。自評にはなるが、恐らく日本語の方がしつくりくると思う。では、本題に入る。

姍々たる柳の糸はそつと墓石の上辺に触れ僅かにも動かぬ、静まり返つた春の月夜。墓石は昼間は人影を浴び鈍重な石塊にしか見えないものの、今こそは月の光に薄白く染められ何かを呟いているように感ずる。例の墓場は妙音寺と呼ばれお寺の裏にあり、野草は柔らかな穂を老木の腰までたなびかせている。傍らで鐘樓が密かに蹲っている。そのすぐ隣に胡坐を組み碑文を丹念に解読しようとする一人がいる。月光を透かし苔斑なる文字を一々指で撥えてはノートに写す。この怪しい人は言うまでもなくそれがしにほかなるまい。日中は先祖を訪れる村人がしばしば来るのを憚り、敢えてこのように夜行動物と肩をならべ霊魂の縄張りに踏み入る。確かに、夜中墓石の後ろで屈み何かを見つめているのを他人が見たら、あまり望ましくは思ってくれないだろう。ともかく、それがしは始めて来日した時、言葉は通じなくとも幸い、中国語の知識があり漢字だけは読めた。時により恐かなほど古物に惹かれる性質に持て余され、普通の書籍はまだ読めなくとも漢字だらけの墓碑なら読めそうだと、とんでもない考えを起し、週に二三次は妙音寺の裏の静まり返つた墓場に赴き多くの古人の姓名法名生没年などを必死に控えた。相当古いものもその中に交えていて、明治以前の年号を幾つか拾ったと思う。どうやら、一人で謎を解いて行くような快感さえ覚えてきた。なかならず、ある古めかしい墓碑に記

された「皇紀」二字が気になった。深く彫られた字の一点一面は朱か何かで彩られていたと思うが、はつきり覚えていない。神武天皇の即位を元年として定めた紀元だということはいふ月日が経てからやつと分かった。大したことはないが、私にとっては大きな発見だった。

その後、この話を関西の友人に聞かせると必ず愕然とする。なんだと、あの陰気くさいところ——しかも深夜や——誰かの墳墓の前で腰を据え黙々と文字を写すなんて、物狂いと思われに決まってるやないか。変なヤツやなあ、と怪しまれるのが通例。行動の裏なる動機すなわち勉強の為の方便だったことを口説いても、なかなか合点してもらえない。お墓めぐりをしていた当時はどうも感じなかったが、何度も言われると、やはり異常なことでもしたかのように感じ出す。それはそれで面白いと思ひ、堂々と語りたくなる。異常は異常でよい。友人には言っていないが、墓碑を写した折節すこぶる草臥れて、たまには墓場の更裏にある崩れかかった「捨て寺」とでも呼ぶべき四畳半一間の小部屋で寝転び一夜を過ごしたことも何度かはある。陰気とは毫も感じず、心地よく眠れた。幽霊は一位も現れなかった。平和だった。

「皇紀」一語で結着される右のような経験はなせかいままでも印象深く残り、私の中で構築され続けてきた「日本」という目まぐるしい概念の芯とまでなっている気がする。それがしの「日本」は否応なく根柢から古い墓碑と結び付けられたらしい。抉りたくても(別に抉りたくもないが)抉れない。繰り返して言うが、それは決して陰気でひっそりしたもののさびしい墓碑ではない。むしろ興味深い謎めいた墓碑。それは赤馬鹿々々しい、独身時代の余韻の響く墓碑。容易く忘れられない墓碑。今はしばらく米国に紐育に寓居している。熊本の小川町(今は宇城市となっている)の妙音寺の一隅に葬られた人々の墓石を何回も撫でた。この渡来している両手を見れば過去の自分と現在の自分との間のズレに呆れる。と同時に、過去現在の間に往来しそれがしに纏わりついているものに甘心する。激流にながされ浮きぬ沈みぬ木の株に蛙がへばりつくように、自分の脳裏にしっかりと貼りつく記憶——妙な生物——の存在に感づく。これらの生物なしには、それがしの「日本」は成り立たない。妙な生物哉。

MESSAGE

お元気ですか?

～本庄スカラーからのメッセージ～
現役奨学生とOB/OGからの近況報告です。

From Myanmar

11期生
ミン・カイ・モー
Minh Khine Maw, Ph.D.
ニューキャッスル医科大学
2008年 岐阜大学博士課程修了



先週シンガポールで「MUSASHI」というお芝居を観ました。(蛭川幸雄演出による日本の演劇)本庄財団の皆さんと一緒にいた、日本留学の日々が懐かしく思い出されました。最近医学教育に関する私の論文が採用され、2014年1月にシンガポール国立大学で発表することになっています。来年日本に行くチャンスがあれば、本庄財団のOB会でも発表できればうれしいです。
写真: 左はニューキャッスル医科大学学長、中央が私、右がイェメン出身の同僚です。

From India

13期生
ビディシャ・チャンダ
Bidisha Chanda, Ph.D.
東海大学
2012年 東京大学博士課程修了



私はインドで医学部を卒業して小児科で研修医をしているときにサラセミア(地中海性貧血)という病気に興味を持ち、血液学研究の道に入りました。当時の病院では一日に20人ものサラセミア患者の治療をおこなっていました。
結婚後2007年に東京に来て東京大学で医学博士号を取りました。現在は東海大学再生医療研究所で博士課程員としてB細胞性リンパ腫におけるmiRNA(マイクロRNA)の役割を研究しています。今後は基礎研究から応用研究への橋渡し研究をしていきたいと思っています。

From India

14期生
ニシャント・サクセーナ
Nishant Saxena, Ph.D.
サウス・カロライナ医科大学
2012年 筑波大学博士課程修了



現在アメリカのサウス・カロライナ医科大学で中枢神経系の神経変性疾患である多発性硬化症の治療のための2つの薬剤の準最適用量の潜在的な併用療法について研究しています。日本で5年間過ごしましたが、「いつも笑顔の国民」という印象を持っています。日本の国土は笑顔の形をしている、とも思います。前向きで我慢強く、勤勉で忍耐力があり、正確で尽力する、これらが私がこの国の人々から学んだことであり、これからも私の人生の指針となるでしょう。私はサウス・カロライナ医科大学の掲げるスローガン「I'm Changing What's Possible」を胸に研究しています。

From Japan

2期生
花木 伸行
Nobuyuki Hanaki, Ph.D.
エクス・マルセイユ大学
2007年 コロンビア大学博士課程修了



2期生の花木伸行です。一度は日本の大学に職を得ましたが、思う所があって日本を飛び出し、今は、南フランスの大学で教えています。フランスに来てから4年が過ぎました。昨年あたりから、かなり研究に集中できるようになり、学会等で成果を発表する機会にも恵まれたため、ヨーロッパの多くの研究者と知り合う事ができました。フランス語の知識が無いままフランスに飛び込むという無茶をしたので、大変な移行期を過ごしましたが、結果は良かったと思っています。今年は、オーストラリアの大学をいくつか巡ることもできました。世界には面白い事を考えている人が沢山いるものですね。皆様にも素敵な出会いがあることをお祈りしています。

From South Korea

8期生
李 和貞
Lee Hwa-Jeong
立教大学
2005年 早稲田大学博士課程修了



現在、立教大学で専任講師として、非常勤も含め、韓国語、韓国社会、教育心理、臨床心理学などを教えています。5年前からボランティアで始めた月1回のハンク勉強会は平均年齢65歳・笑顔溢れるグループで私の元気の源です。本年の3月、財団の皆様とお会いできたあの感動の瞬間は、キラキラ輝くハンコクの夜景とともに未だに脳裏に焼き付いています。本庄財団と出会えて10年、長きに渡る温かいご慈愛を賜りながら私は素敵な思い出をたくさん作ることができました。財団の皆様の深い友情の絆への感謝の気持ちをいつまでも忘れず、この先、力の及ぶ限り教育の場から御恩返しさせて頂けたらと思っています。

From Nepal

4期生
ナビン・アリヤル
Nabin Aryar, Ph.D.
ルクミニ財団 企画部長
2007年 一橋大学博士課程修了



みなさんこんにちは。ネパールのナビンです。皆さん世界のどこかで大なり小なりこの世界をよくするための活動をされていることでしょう。本庄財団の仲間としてそれが義務でもあると思います。先進国と発展途上国との大きな違いは基本的なものを持っているか持っていないかだと思います。つまり教育、雇用、健康などが国民みんなに与えられているかどうかです。これら基本的な権利を与えられていない人々がいます。特に女性はそうです。私はネパールの地方都市で教育の機会を持ってない少女たちのために活動をしています。私の仕事は微力ですが、大きな変革はまず小さなことから始めなければいけないと確信しています。

From Germany

12期生
スヴェン・フォストマン
Sven Forstmann, Ph.D.
株式会社爆発研究所
2013年 早稲田大学博士課程修了



日本と言えば東京、私はそこに9年前からそして今も住んでいます。東京は活気に満ち溢れ決して眠らない街。しかし人々は礼儀正しく協力的で親しみやすく性格は静かです。私は2011年に大震災と福島原発の事故に遭遇しました。偶然にも東海地震が予測される地域にある浜岡原発に関する書物を読んだ直後でした。福島は大変なことになってしまいましたが、これをきっかけに日本が原発について考え直さないとグリーンエネルギーを活用する方向に進めばいいと思います。私は早稲田大学で国際情報通信を学び、2013年に博士号を取得しました。現在株式会社爆発研究所にエンジニアとして勤め、爆発の安全性に関する仕事をしています。可燃性の液体やガスを扱う企業に対して、爆発を予防するための複雑な計算流体力学シミュレーションを行っています。私の仕事が日本のあらゆる職場や作業所の安全管理に役立てられれば幸いです。

From Bangladesh

14期生
シエド・エムダッド・ホック
Syed Emdadul Haque, Ph.D.
国連大学公衆衛生研究所
2012年 東京大学博士課程修了



2013年8月からUNU-IIGHでポストドクター研究員として勤めています。以前はバングラデシュにあるシゴコ大とコロンビア大の共同研究所でヒ素の健康被害などについてのコホート研究に携わっていましたが、現在も彼らと一緒に研究をしています。私の研究は、非伝染病、ヒ素やマンガン等の環境暴露、大気汚染、学校の保健教育、家庭内暴力、医療廃棄物管理、慢性疾患、気候変動の健康への影響などです。世界中の優秀な研究者と有意義な共同研究を行いたいと思います。

From Japan

16期生
児林 聡美
Satomi Kobayashi
東京大学



ナイジェリアで実施された調査を手伝うため、2013年7月に2週間ほど現地に滞在しました。調査の目的は、母乳育児実施状況とその阻害要因を解明することです。ナイジェリアは他のアフリカ地域と比べて母乳育児の実施率が低く、その原因も明らかにされていないため、何をどう改善するべきかという介入方針を決められないという現状があります。今後明らかにされる今回の調査結果が、乳幼児の健康に少しでも貢献できればと思います。

From South Korea

16期生
金 佑勁
Kim Woo-Kyung
東京大学



シンガポールで開かれた国際学会に行ってきました。様々な国から来た研究者の方々と議論しながら他国の良い友達が出来て嬉しかったです。また、発表後に韓国の国立研究所の人から声をかけて頂き、良い条件だったので卒業後にそこで働くことになるかもしれません。今回の学会を通してよい出会いがあり参加できて光栄でした。これを可能にしてくれた本庄財団の支援に御礼を申し上げます。

From Uganda

16期生
ダビド・オデケ・オツヤ
David Odeke Otuya
東北大学



この日は私の人生にパワーを与える特別な日でした。IEEE仙台部会で優秀論文賞に選ばれました。私の研究人生の中で初めての受賞です。このことをこれからの研究活動の大切なモチベーションにしていきたいと思います。東北大学超高速通信研究所の皆様にご心より感謝いたします。特に葛西先生には深く感謝しています。先生が暗中模索のときでもしっかりと指導してくださいました。ありがとうございました。
※IEEE=米国電気電子学会

From Bangladesh

15期生
ムハンマド・マスッド・カリム
Md. Masud Karim
新潟大学



初のヨーロッパ訪問がイタリアで開催された国際シンポジウム「ブラシカ2012」への参加でした。(ブラシカはアブラナのこと)この分野で有名な研究者に会えたことは非常に有意義でした。同時にローマの食事、文化に触れ、世界最小の都市ヴァチカンやアルクメデスの生誕地であるシチリー島のシラクーズ、世界最大の円形劇場(コロッセウム)、地中海などを訪れました。

From Sri Lanka

16期生
テルハバディゲダラ・ラヒル・ニローシャン・ジャヤコティ
Thelhadigedara Lahiru Niroshan Jayakody
鹿児島大学



音楽が好きでプロのキーボードプレイヤーとしてスリランカで7年間活動していました。来日後は音楽を続ける機会はないと思っていましたが、幸運にも佐賀大学のジャズサークルに巡り合いました。そこでギターを演奏することになり、今はギタリスト、ヴォーカリストとして佐賀大学インターナショナルスチューデントバンドを率いています。皆さんを音楽という素晴らしい世界にご案内します。音楽は世界を席巻します。私は音楽と日本の生活を心からエンジョイしています。

From Laos

16期生
シットサイ・ドンチャック
Sithixay Douangchak
東京農工大学



今年7月20日(土)に六本木ヒルズで開催されたASEANフェスティバル2013で司会をつとめ、母国の伝統的な踊りなどについて説明をしました。今回のASEANフェスティバルはアセアン諸国の学生が各国の民族舞踊、民族衣装ファッションショー、ゲームや特産品の展示をするフェスティバルでした。

From Japan

16期生
杉原 謙光
Kenkoh Sugihara
東北大学



現在私はドイツのダルムシュタット工科大学でヤモリの研究をしています。本庄国際奨学財団のご支援のおかげで、研究三昧の日々です。雑務に追われず研究できる環境はまさに天国です。海外での生活は日本とは違った文化や習慣に戸惑ったりすることもあります。新しい体験ばかりで生活そのものも良い勉強になっています。ヤモリをはじめ爬虫類の嫌いな私は、この一年間でヤモリだけは見る事が出来るようになりました。

お元気ですか?
～本庄スカラーからのメッセージ～

From Philippines
17期生
ロウエラ・シャロット
Lowela Sjarot
東京大学



今年の夏休みは家族とフィリピンのカミンギン島で過ごしました。家族との旅行は初めてでした。あいにく天気があまり良くなかったのですが長く家族と一緒にいられてとても幸せでした。カミンギン島にあるホワイトアイランドに行きました。木が生えているだけでの小さな無人島ですが、一面白い砂で覆われているのでその名がついています。

From Sudan
17期生
エミチサル・アハムド・タレハ
Emthital Ahmed Talha
横浜国立大学



今年3月に横浜国立大学工学研究科修士課程を修了し博士課程に進学しました。今年は二つの都市を訪問しました。8月に広島、7月には「医学生物工学学会」の国際学会に出席するために大阪を訪れました。そこで論文発表を行い、多くの生物工学の研究者と知り合うことができました。2013年は私にとって思い出深い年です。一日一日が深く心に刻まれています。

From Kazakhstan
17期生
アイスル・ジュスポフ
Aisulu Zhussupova
慶応義塾大学



昨年は学会にたくさん出席しました。日本癌学会(札幌)、日本乳がん学会総会(浜松)、アメリカ癌研究学会(ハワイ)、アメリカ臨床病理学会(サンフランシスコ)で研究発表を行いました。世界中から集まった専門家とディスカッションする中で学ぶことは大きいです。夏休みにはカザフスタンに帰省し家族や友人と過ごしました。

From South Korea
17期生
朴 晟源
Park Sung-Won
東京大学



2013年10月、若手県O町の東日本大震災応急仮設住宅団地の調査に行ってきました。仮設住宅の住民により快適な生活のための住まいの工夫と一緒に考え、さらにこれから建設が本格的に始まる復興住宅が住民にとってよりよいものとなるように、地方自治体などに協力しています。

HISFワークショップ

2011年よりOB/OGを中心に講師を招き、ディスカッションを通して交流を深めるシリーズを開催しています。



第4回 2012年11月4日
講師: 山田 貢(日本人1期生)

タンパク質構造解析の
過去・現在・未来
～見えない主役を見る～



第5回 2013年7月7日
講師: 周 炫宗(5期生)

イノベーションのための
多様性と集団的創造性
～一緒に飛躍しませんか～



第6回 2013年11月24日
講師: 後藤田 正純(衆議院議員)

日本の課題
～安倍政権の課題～

facebookに参加しよう!

Honjo International Scholarship Foundationのグループアカウントで財団からのお知らせや、本庄スカラーからの研究・仕事に関する情報、国の情報、プライベートでの活動の情報、質問、募集、意見などを活発に発信・交換しています。ぜひリクエストを送ってください。

<https://www.facebook.com/groups/HISFhonjo/>

名簿の作成にご協力ください!

ホームページで名簿を作成しています。連絡先お知らせフォームから情報をお送りください。名簿のページへ入るためのIDとパスワードは本庄スカラーのみにお知らせしています。財団事務局へお問い合わせください。

<https://hisf.or.jp/update/form.html>

2014～2015年度奨学金・研究助成金の公募案内

奨学金プログラム

- 外国人留学生奨学金(第19期生)【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の外国人留学生
- 国内日本人大学院生奨学金(第10期生)【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生
- 海外留学日本人大学院生(第18期生)【対象】海外の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生

海外提携プログラム

- Jack Lewis Scholarship Program (南カリフォルニア大学)
- Professor Misawa Scholarship Program (ハワイ大学)
- JMSA Scholarship Program (米国日本人医師会)
- JAA Scholarship Program (ニューヨーク日系人協会)
- CUSSW Scholarship Program (コロンビア大学)

研究助成金プログラム

- 食と健康研究助成金【対象】健康維持に対する食品あるいは食品成分の効果を、ヒトを対象とした試験あるいは代替試験法によって明らかにしようとする研究に対する助成。

※募集期間等募集に関する詳細は、ホームページで公表します。申請書類もホームページから取得してください。

※海外提携プログラムは、各提携先の大学または団体において募集・選考を行います。

詳細は本庄財団のホームページに掲載されている各大学または団体のホームページをご覧ください。

**川崎翔子さんがイタリアで
リサイタルを開催**

ミュンヘン音楽大学に留学中の川崎翔子さん(16期生)がイタリア北部の町ヴェルチェッリで行われたヴィオッティコンクールに出場された後、リサイタルが開かれ、その模様が地元新聞に掲載されました。



— 記事の概要 —

「音楽の館」で〜ヴェルチェッリの住民がヴィオッティコンクールの出場者をホームステイにヴィオッティコンクールの出場者が四重奏楽団員だった3名の家族にホームステイに招待されるようになって2年、今年にはピアニスト川崎翔子さんがレジーオとマレンゴ宅に招待された。さらにダレーラ家が川崎さんのコンサートを企画し、ハイドンとブラームスそして拍手喝采のあとドビュッシーとバッハの2曲をアンコールで演奏した。

**Mohamed Omer Abdinさん
(11期生/スーダン)が
「わが盲想」をポプラ社より出版**

盲目の留学生Abdinが福井盲学校、東京外国語大学へと留学した15年間で、「オヤジギャグ」をちりばめながらユーモアたっぷりに描かれています。人並み外れた秀才だから盲目で日本留学を成し遂げられたと思いましたが、謙遜はあるにせよ、この本に描かれたAbdinは普通よりもうちょっと回り道をしてしまうぐらいの少年であり青年でした。だからここに書かれているのは成功自慢話ではない、「お前もがんばれよ」の上から目線文章でもない。むしろ、「Abdinでもこうだったんだ」と彼を踏み台にして、自分を鼓舞できるようなありがたいエッセイです。



財団の概要

【名 称】公益財団法人本庄国際奨学財団
【英文名称】Honjo International Scholarship Foundation
【設 立】1996年12月25日
【理事長】本庄照子

【目 的】この法人は、学術研究への奨学援助および研究助成を行い、もって我が国と諸外国との教育・学術・文化における交流及び相互理解を促進するとともに、人材の育成及び教育・学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

謝辞

この機関誌の作成にあたり、英文翻訳・英文校正をしてくださったKris Reevesさん、Ahmed Zahirさん、Fabio Ascheroさん、Le Hieu Hanhさんに感謝いたします。そして事務局からの呼びかけに応じて早速メッセージと写真を送ってくださったみなさま、ユニークで興味深い寄稿をしてくださったみなさま、お忙しいところ本当にありがとうございました。

17年間の軌跡

Journey of 17 years



1997 故小渕元首相と歓談
With the deceased former Prime Minister, Mr. Keizo Obuchi at the annual party



1998 忘年会で理事・評議員の方々と
Directors at the Year-End Party



1999 故本庄正則前理事長と懇親会で
With the deceased former chairman, Mr. Masanori Honjo at the annual party



2000 1期生～4期生の記念写真
A memorial photo of the 1st-the4th recipients



2001 理事会
The directors' board meeting

1期生から17期生まで思い出の写真を集めました。懐かしい顔が見つかりますか？

Pictures from 1996-2013. Find someone looks familiar!!



2002 歓送迎会で新入生の挨拶
Freshmen's speech at the Welcome Party



2003 照子理事長になって初めての歓送迎会
At the Welcome & Farewell Party: the first one after Mrs. Honjo was appointed to the president



2004 韓国で同窓会を開催
The reunion party in Seoul, Korea



2005 忘年会で
At the Year-End Party



2006 歓送迎会で本庄八郎会長と歓談
With Mr. Hachiro Honjo at the Welcome & Farewell Party



2007 静岡研修旅行
Shizuoka trip



2008 京都で茶道を習う
Training of tea ceremony at Kyoto



2009 忘年会のクイズ大会
Question Game at Yea-End Party



2010 京都で書道を習う
Training of Calligraphy at Kyoto



2011 気仙沼で東日本大震災復興ボランティア
The volunteers for the work to help people devastated by 311 earthquakes in Kesenuma



2012 京都研修旅行で舞妓さんの日本舞踊を鑑賞
Maiko-san's Japanese traditional dance in Kyoto



2013 歓送迎会
The Welcome & Farewell Party in 2013